

食育を通じての短大と地域の子どもたちとの交流事業の展開

－保育学生・製菓コース学生の専門性を活用して－

Developing a Communication Project Between College Students and Local Children Through Nutrition Education

－ Utilizing the Expertise of Childcare and Confectionary Students －

佐竹 要平・平田 安喜子

1 研究の背景と方法

2005年6月に成立した食育基本法により、学校や地域など様々な場で食育に関する取り組みがおこなわれている。食育基本法の前文では食育を「生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付けるとともに、様々な経験を通じて『食』に関する知識と『食』を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる」としている。そのため、都道府県、地域、学校でのそれぞれの取り組みが始まっている。

第1条では、「国民が健全な心身を培い、豊かな人間性をはぐくむ食育を推進するため、施策を総合的かつ計画的に推進すること」を本法律の目的としている。また、その基本的施策として、「家庭における食育の推進」があげられ、具体的な推進項目として、

- 1) 生活リズムの向上
- 2) 子どもの肥満予防の推進
- 3) 望ましい食習慣や知識の習得
- 4) 妊産婦や乳幼児に関する栄養指導
- 5) 家庭や地域における栄養教諭を中核とした取り組み
- 6) 青少年及びその保護者に対する食育推進

の6項目が挙げられ、食育を実践することは、個人や家庭の問題だけではなく、社会全体の問題としている。

本研究は、短大周辺の椎木地区の子どもた

ちに、自分たちで収穫したサツマイモを調理する体験を通じ食物を身近に感じてもらう、食の大切さを実感して貰うことを目的に実施した事業の報告である。

事業の具体的展開としては、サツマイモの収穫や焼きイモ会、サツマイモを使ったお菓子作り教室を保育学科と食物科の製菓コースの教員・学生でおこなっている。そして、行事ごとにアンケートを実施して食育に対する意識や行事に対する満足度を調査している。

2 椎木地区の概要と地区との交流

椎木地区は、佐世保市の北西部、相浦川河口西岸に位置しており、比較的細長い地域である。

世帯数は、1,089世帯、人口2,011人（平成19年2月1日現在 佐世保市調査）となっている。そのうち、町内会に所属しているのは519世帯（加入率47.7%）である。また子供育成会には98名の子どもが参加している。

長崎短期大学はこの地区に1985（昭和60）年に、九州文化学園高等学校は、2006（平成18）年に矢岳町から移転している。

長崎短期大学が椎木地区との本格的な交流を始めたのが、「防犯パトロール活動」に平成17年度から町内会の要請に基づき学生・教職員が参加してからである。防犯パトロール活動とは、2004（平成16）年7月「犯罪、非行のない安心、安全な町づくり」を目指して町

民主体になって結成された活動である。平成18年度には警察庁から「全国安心、安全な町づくり地域100選」の中に選ばれている。主な活動として、毎週月曜日午前7時30分から約1時間程度おこなう「交通安全声かけボランティア」と毎週土曜日午後9時から約1時間程度行う「夜の防犯パトロール」がある。平成17年度は長崎短期大学から延べ47名、平成18年度は延べ50名の学生・教職員が参加している。

今年度の参加者にパトロールの感想をアンケートしたところ、「椎木町の人と交流できて楽しかった」、「椎木町の方々が子どもや地域を大切に見守っていかうとする思いが伝わり私もこのような地域に住みたいと思った」などの意見があった。

そして、昨年度より佐竹・宮崎ゼミの総合演習の授業の中でサツマイモ作りをおこない、子供育成会の子どもたちを招待してのイモ掘り会や焼きイモ会を実施している。昨年度は、イモ掘り会に子ども4名、保護者4名の参加で、焼きイモ会には子どもと保護者を含めておよそ40名の参加者であった。

3 イモ掘り会の取り組み

1) サツマイモ作り

今年度も昨年度同様に短大近隣の休耕地を借り、総合演習の授業の一環としてゼミ生12名とともにサツマイモ作りを7月から開始した。



図1 学生による畝づくり

最初に雑草を抜く作業から始めたが、半年間全く手入れをしていなかったため、雑草が野原のように生い茂っていた。そして、畑を耕す作業をおこなったが、土は思っていたよりも硬く、鍬での作業ではなかなか進まなかった。そのため、土地の所有者に耕運機を使って耕してもらった。後日畝を作り、7月下旬にサツマイモのつる挿しをすることができた。

2) イモ掘り会

サツマイモは、3ヶ月間草むしりや水やりなどおこなって成長を見守ってきた。地域の子どもたちを集めて交流を図りながら収穫をする「イモ掘り会」を実施することとした。イモ掘り会は、地域の子どもたちに土や虫などの自然に触れる楽しさを知り、自分たちの手で自らサツマイモを掘ることにより収穫する喜びを味わうことを目的としている。今回の事業の2度目の行事となった。

実施日：平成18年11月4日（土）

11時～13時

参加者：椎木町子供育成会

幼児 6名

小学生 24名

中学生 1名

表1 イモ掘り会参加者内訳

	幼児	1年	2年	3年	4年	5年	6年	中学	計
男子	1	4	3	5	2	1	1	0	17
女子	5	2	0	0	3	3	0	1	14
計	6	6	3	5	5	4	1	1	31

保護者 14名

短大生 11名

内容：イモ掘り

おにぎり・豚汁の食事会

実施場所：佐竹ゼミ サツマイモ畑

昨年度は教員主体で各行事を準備していたのをできる限り学生主体におこなうようにした。今回は、進行係、豚汁係、カメラ・ビデオ係、

食育に関するアンケート作成係に分かれ事前・当日とそれぞれの役割に基づき行動した。

進行も学生がおこない、本校での学長の挨拶の後、場所を移動し現地で諸注意を伝えた。子どもの号令により一斉に31名の子どもと保護者、それに短大生がイモ掘りを開始した。

イモ掘り会は、畑が狭く人数が30名近くいたため、30分程度で掘り尽くしてしまうかと思われていたが、土が思ったより硬く子どもたちが苦戦していた。普段土に触れることのない保護者もスコップを手に取り、子どもと協力してイモ掘りをし、スキンシップを図っていた。また、学生たちも子どもたちに積極的に話しかけ、好きなテレビや学校での話題などを話しながら徐々に打ち解けてきた。イモ掘りは、約1時間程度おこなった。

その後、学生が朝から用意した豚汁とおにぎりや軽い昼食をとり、最後に会に関することや食育に関するアンケートを実施している。

3) 参加者アンケート

行事ごとに学生が作成した子ども用アンケートと保護者用のアンケートを実施している。イモ掘り会では、子ども20名（回答率64.5%）と保護者12名（回答率85.7%）から回答が得られた。

子どもに会が楽しかったかどうか聞いたところ、「楽しかった」、「少し楽しかった」を合わせると90%近くなり概ね好評な会となった。一方、会の改善点について聞いたところ、「もっ

とイモを増やしてほしい」、「ゲームをやってほしい」、「掘るコツを教えてほしい」との回答があった。「もっとイモを増やしてほしい」との要望は、去年よりも作付面積を増やしたのだが畑に対して参加する子どもの予想より多くなったために、物足りなさを感じたためだと思われる。次に「ゲームをやってほしい」との要望では、年齢によって個人差があるがイモ掘りに飽きる子どもがいたためだと思われる。次回の焼きイモ会では保育学生の特性を活かしたゲームを実施している。「掘るコツを教えてほしい」という要望では、土が予想以上に硬く掘りにくかったため、来年度はイモを掘る前に「イモ掘り講座」をしてから作業に入ることを検討している。

次に保護者にイモ掘り会の感想を聞いたところ、「昨年も参加して楽しみにしていた」、「毎年恒例のイベントにしてほしいです」、「子どもたちと楽しく土いじりでできて良かった」、「自然の中で人と触れ合うことができ、とても良い体験ができた」という意見を頂いた。この会が保護者にとって自然と触れ合う機会や子どもとスキンシップを図るきっかけになっていたことが分かった。

4) 学生アンケート

当日参加した学生11名にイモ掘り会を実施しての感想をアンケートした。

・つる挿しから、食べるまでの過程の中で、植物を世話する大変さと、食べることの喜びを

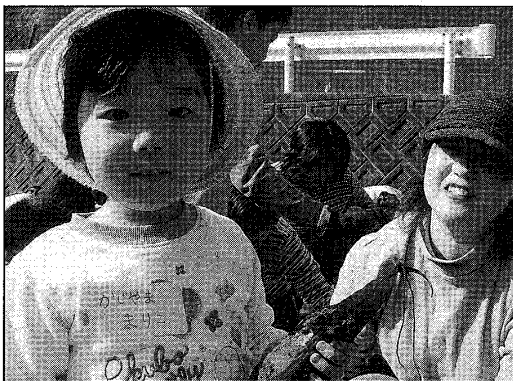


図2 親子での参加



図3 昼食の風景

学ぶことができた。そして、私たちが普段食べている物もいろいろな人の苦労の上に食卓に届いていること知り感謝することの大切さも学べた。

- ・イモ掘り会を通じて、子どもとの関わり方（発達に障害のある子ども）や保護者との関わり方を学ぶことができた。また、アンケートをとることで、子ども、保護者の要望を知ることができて参考になった。
- ・親子で自然に触れあう機会があまりないのでこのような催しをすることで、親子で自然の中で協力する姿を見ることができたことを嬉しく感じた。
- ・反省点として、イモのつるを挿す前にしっかり土を耕した方が良かった。
- ・イモを多く掘った人が勝ちになるようなゲームをして掘る意欲に繋がるようにしたらいいと思った。

などが挙げられた。このアンケートにより、イモ掘り会に対して学生がそれぞれに主体的に参加し、意義を感じているとともに、会に対して改善点を自覚していることが読み取ることができる結果となった。

4 焼きイモ会の取り組み

1) 焼きイモ大会

実施日：平成18年12月2日（土）

11時～13時

参加者：椎木町子供育成会

幼児 3名

小学生 18名

保護者 10名

短大生 10名

内容：ゲーム

工作

焼きイモ

おにぎり・イモ汁の食事会

実施場所：佐竹ゼミ サツマイモ畑

表2 焼きイモ会参加者内訳

	幼児	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男子	3	0	1	2	3	0	0	9
女子	0	2	2	0	3	3	2	12
計	3	2	3	2	6	3	2	21

イモ掘り会より約1ヶ月後の12月2日（土）に少し小雨の降る中、会は実施された。

開会宣言を子どもたちにお願いし、照れながらも協力してくれた。参加者は、子ども21人、保護者10人とイモ掘り会の時よりは少なくなった。最初に学生が焼きイモの手順を示した。濡れた新聞にイモを包み、その上からアルミホイルに包み焚火に投げ入れた。子どもたちも同様に真似てイモを焚火に投げ入れていた。焼きイモをする際に濡れた新聞紙で包むとイモが万遍無く焼けるということに特に感心していた。

前回のアンケートを活かし、初めて貨物列車や伝言ゲームなどのゲームを取り入れた。また、昨年度同様に宮崎先生が準備してくれた松ぼっくりでクリスマスツリーを作った。工作は、子どもたちだけではなく、保護者の方も興味を持ち楽しんで頂いた。

その後イモも焼き上がり、あつあつのおイモともに、朝から学生が用意したおにぎりと前回収穫したサツマイモを使ったイモ汁を振舞った。最後にアンケートに記入して貰った。



図4 イモを包む様子

2) 参加者アンケート

焼きイモ会でも同様に子どもと保護者を対象としたアンケートを実施した。子ども16名(回答率76.2%)と保護者5名(回答率62.5%)となっている。

子どもに焼きイモ会は楽しかったかどうか聞いたところ「楽しかった」、「少し楽しかった」を合わせると100%と大変好評であった。来年度の要望では、「イモが硬かったのもう少し焼いてほしかった」との意見があった。

次いで、保護者焼きイモ会に参加しての感想をきいたところ、

- ・最近このような経験は意図して参加しないと出来ないのが良い経験となった
- ・ゲームや工作なども体験ができて楽しかった
- ・寒かったけど、とても大勢で楽しく過ごせて良かった

という意見が出た。子どもだけではなく保護者の方も楽しんでいただようである。今回の焼きイモ会が地域の触れ合いに貢献できたと推測される。

3) 学生アンケート

当日参加した学生10名に焼きイモ会を実施しての感想をアンケートした。

- ・焼きイモ会を通して、イモを枯れ葉で焼く時の火の付け方や火が強くなった時の対処の仕方、イモを焼く時は濡れた新聞で巻いてさらにアルミで巻くことなど、焼きイモの作り方を学んだ。



図5 イモを食べる参加者

- ・普段野外遊びの少なくなっている子どもたちに、外での新たな発見・太陽の光を浴びることの気持ち良さなど、楽しさを伝えることができた。
- ・焼きイモ会で、短大生と地域の人たちとの心の触れ合いや、子どもたちの素直さを感じることができ、大変良い経験ができた。
- ・反省点として、当日は寒かったので、もっと体を動かすゲームや、発達に障害がある子どもたちが参加しやすいゲームを取り入れるべきだったと思った。

などが挙げられた。就職先である保育所や幼稚園でもおこなわれている焼きイモの作り方など体験できたことは学生にとっても貴重な経験となっている。また、保育者を目指す者として、子どもにより喜ばれるためにゲームの工夫する必要性を感じていたようである。



図6 ゲームをする様子

5 夏休み親子クッキングの取り組み

今年度保育学科の地域の子育て支援活動の一環として、地域の小学生を対象に「食」を身近に感じてもらう機会を提供するため、親子クッキング教室を開催した。これは、親子双方にとって、望ましい食習慣や知識の習得へのきっかけになればとの思いから計画した。当初は、11月のイモ掘り会後の1回を予定していたが、急遽夏期休暇中にも計画し、年間2回の実施となった

1) 夏休み親子クッキング

実施日：平成18年8月25日(金)

参加者：椎木町及び相浦児童センター

小学生 21名(幼児2名)

保護者及び引率者 4名

表3 夏休み親子クッキング参加者内訳

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男子	1	1	1	1	0	3	7
女子	1	1	0	5	3	4	14
計	2	2	1	6	3	7	21

短大生ボランティア 8名

内容：手捏ね調理パン

バナナのカップケーキ

実施場所：長崎短期大学 製菓実習室

参加人数が多く、パン生地を捏ねるスペースの関係で、2つのグループに分けての生地作りとなった。参加者のうち3分の1程度の子どもたちがパン作りの経験があると答えたが、実際に生地から手で捏ねることは初めてであった。強力粉200gの生地を捏ねるには、短大生でも力を必要とする。参加した小学生は表3に示すように、1年生から6年生と幅広く、低学年の子どもたちには保護者や短大生が手を貸しながらの生地作りとなった。

図7に生地を捏ねる様子を示している。パン作りの感想には、「難しかった」、「疲れた」といったコメントも見られたが、ベトベトした生地を触ることが「楽しかった」、「捏ねるのが楽しかった」と興味を持ったと思われる感想も見られた。

パン生地を捏ねた後、一次発酵(フロアタイム)を終えた生地に触れると子どもたちはその触感に思わず笑顔を見せていた。自分たちが苦勞してまとめた小麦粉の塊が、時間を置くことでふわふわした生地に変化することに驚いたようである。「気持ちよかった」とのコメントが寄せられた。

今回は1人8個に生地を分割し、好みの具



図7 生地を捏ねる



図8 一次発酵後の生地

を使って成形することにした。こちらの提示した見本を見ながら様々な形の調理パンを作っていた。小麦の形から、だんだんと食べたことのある調理パンの形に近づくにつれ、互いに相談したり、見に行ったりと興味が増していく様子が見られた。図9に成形されたパンと図10に出来上がったパンを示した。

2次発酵(ホイロタイム)後、チーズなどのトッピングをほどこし、溶き卵をぬったパンを焼成し、昼食とした。

14時近い昼食時間になってしまい、子どもたちの食欲は旺盛であった。ボランティアで参加した短大生に昼食を提供してくれるように呼びかけたところ、それぞれがパンを差し出す様子が見られた。分配の経験につながるが、今回の参加者は気持ちよく提供してくれた。



図9 成形されたパン



図10 出来上がったパン

2) アンケートから

夏休み親子クッキングでは、パンの発酵時間を利用して、「食」に関するクイズを行う予定であった。けれども、予定外に参加人数が増えたことから、作業を2分割したために時間の確保ができなくなった。そのため、子どもたちにアンケートを行うことに変更した。

その内容は、

1. 朝ご飯を食べますか
2. 1日の食事の回数
3. 好き嫌いがあるか
4. 野菜や果物、魚の名前を知っているか
5. 夏休みお手伝いをしたか
6. 食事時の約束

の6項目であった。

別紙として「野菜の名前当てクイズ」ともに本人に記入してもらった。

朝食の喫食率に関しては、朝食欠食児童が増加している。「平成12年度児童生徒の食生活等実態調査」(独立行政法人日本スポーツ振興センター)の調査によれば、小・中学生の20%が1週間のうち朝食を食べないことがあると答えており、不規則な食事が目立つようになった。成長過程の小学生が朝食を摂らないということは身体づくりだけでなく、基本的な生活リズムを身につけることも困難になる。将来自らの健康管理が出来るようにするためには、身につけておかなければならない習慣である。幸い今回参加した小学生はほぼ朝食を食べていた。ただし、今回はその献立内容まで調査していない。「親から継ぐ『食』、育てる『食』 2005」(農林中央金庫)の普段朝ごはんに食べているものでは、複数回答ではあるが小学生の75.9%がパンを食べており、ごはんの65.3%を上回っていた。中には、お菓子やケーキといった回答も見られる。次回は、朝食の内容に関して実態を確認したいと思う。

好き嫌いに関しては、21名中20名が「ある」と答えた。今回は料理名とも食材名とも表記しなかったため、好きなもの、苦手なものとして上げられた項目はまとめることができなかった。しかし、次の質問項目である「知っている野菜、果物、魚の名前」と比較すると各家庭の食卓でどのような食材が使われているか垣間見ることが出来る。例えば、野菜の名前には、「トマト・きゅうり・にんじん・玉ねぎ」といった子どもの好きな料理に使われ

る素材から、「ゴーヤ・オクラ・大豆」といった子どもがあまり好まないと思われる素材をあげる子どもと幅広かった。この地域では田畑があることから、自宅や近所で農産物を眼にすることが多いのではないだろうか。また、魚の名前も多岐にわたり、佐世保市が海産物に恵まれていることや、家族の誰かが釣りをするのではないかとと思われるほどであった。今回各項目5品目の名前を書いてもらったが、5つ挙げられない子どもは見られなかった。

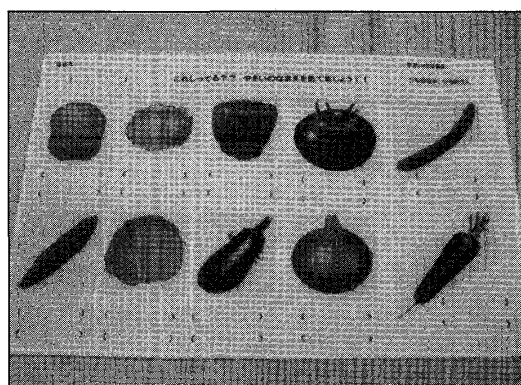


図11 野菜の名前知っているかな

また、図11に示した10種類の野菜のイラストをみて、それぞれの名前と土の中・上どちらに生育するのか尋ねてみたが、こちらの正解率も高かった。

夏休み期間のため、各家庭でお手伝いをしているか尋ねたが、こちらも20名の子どもたちが何らかの形でお手伝いをしていた。掃除、洗濯もあげられたが、食事に関する手伝いをしている子どもたちも多かった。学年によって内容は異なるが、低学年では、皿運び、ビール取り、学年が上がるにつれ、料理の手伝い、皿洗い、などが増えてきた。

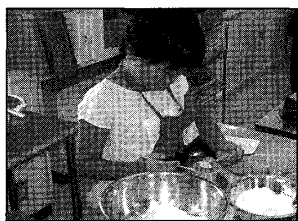


図12 計量する様子



図13 杓文字を使う様子

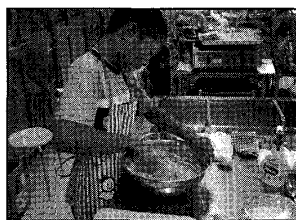


図14 泡だて器を使う様子

図12・13・14に示すように、今回のクッキングでは、日常の調理で行うような、「計量スプーンで調味料を計量する」、しゃ文字や泡だて器で「材料を混ぜる」といった作業を行ったが、子どもたちは一生懸命に取り組んでいた。学年や経験によって手際は異なるが、側で保護者や短大生が補助することで問題なく行うことができた。

食事時の約束に関しては、21名中16名の子どもたちが「ある」と答えた。内容としては、遊ばない、歌わない、テレビを見ないといった「ながら食」を注意する内容や、挨拶をする、ひじを突かない、茶碗を持つ、姿勢といった「食事マナー」、「残さない」といった項目があげられた。このような約束事があげられることは、家族と共に食卓を囲んでいると考えられる。

1981年足立己幸氏の調査結果がNHKで放送され、大きな反響があった。子どもたちのひとり食べの問題点が提起され、「孤食」、「小食」、「個食」といった状況をどうするのか議論された。足立氏は、同様の調査を1991年、1999年に行っているが、調査結果では、ますます子どもたちのひとり食べが増え、様々な問題が深刻化しているという。「こしょく」という現象も、「固食」、「粉食」で表される実態が追加されている。本来人間は他の生物と違い、「(えさを)

食う」のではなく、「(食事を)食べる」はずが、その文化を失いつつあるように思われて仕方ない。

今回親子クッキングに参加した小学生は、家族と食卓を囲む「共食」がなされているのか、比較的「食」に対する興味のある子どもたちだと思われる。

6 お菓子作り教室の取り組み

1) サツマイモを使ったクッキング

実施日：平成18年11月11日(土)

参加者：椎木町

小学生 9名(幼児1名)

保護者 3名

短大生ボランティア 11名

表4 参加者内訳

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
男子	0	0	0	2	0	0	2
女子	1	2	0	1	1	2	7
計	1	2	0	3	1	2	9

内容：スイートポテト

いきなり団子

実施場所：長崎短期大学 製菓実習室

短大近くの敷地を提供して頂き育てた「サツマイモ」を使ったお菓子作りを実施した。

今年度2回目の親子クッキングであったが、公民館での活動と重なり、参加人数は少数となった。前週に行われた「イモ掘り」体験者は3分の1程度だったが、イモ掘り経験者は多く、サツマイモがどのように収穫されたか理解されていたので、早速調理にかかった。

スイートポテトの準備として、サツマイモを焼いている間、「いきなり団子」を作ることにした。これは熊本県の郷土料理の一つであるが、サツマイモを使った簡単なお菓子である。

中身となるサツマイモを切るとき、イモが

小さく硬かったため苦勞していた。前回とは違い包丁を使って材料の準備を行った。餅粉と小麦粉を合わせ生地を作るとき、耳たぶ程度の硬さを目安という、自分の耳たぶで硬さを確認しながら捏ねていた。サツマイモを生地で包むとき、高学年の子どもたちは要領よくきれいに包めており、尋ねると日ごろお菓子づくりをしていることがわかった。また低学年の子どもの中には、几帳面に大きさをそろえ、時間をかけながら包んでいる様子も見られた。

スイートポテトでは、火の通ったサツマイモをスプーンでくり貫き、裏ごしする作業があるが、どの子も熱心に取り組んでいた。

昼食時には間に合わなかったが出来上がったスイートポテトといきなり団子を目にした時、前回同様子どもたちは失敗なく作れたことに安堵と喜びの表情を見せた

2) 昼食の様子

夏休み親子クッキングでは、自分たちの作った調理パンと合わせて野菜スープ（人参・キャベツ・玉ねぎ・ベーコン）を、サツマイモを使ったクッキングでは、イモご飯と澄まし汁（鶏肉・ごぼう・白菜）を昼食として食した。野菜が嫌いと答えた子どもが多かったため、野菜たっぷりの汁物は好まれないのではないかと予想していたが、すべての子どもたちがお代わりをした。これは集団で喫食するという、作業をして空腹になったことに影響されると思われる。中には女子短大生顔負けの食欲を見せる子どももいた。

偏食予防には、いろいろな食材に触れる体験も有意義であるが、食べたことのある食材を違った組み合わせ、調理法で提供することも一つの方法ではないだろうか。

3) 「お菓子作り体験」のまとめ

飽食の時代といわれ、豊かな食生活を過ごすことができる現在、何でも、いつでも手に

入るがゆえに、逆に貧しい食生活を送っている現状がある。子どもたちが健全な食生活を実践することは、健康で豊かな人間性を育てていく基礎となる。将来自分の健康を維持できるように、正しい栄養に関する知識を選別し、食を楽しむことができるように、知識を身につけるためには、保護者も交え、「食育」を推進する必要がある。

ところが保護者の共働きの増え、保護者も子どもたちも忙しい生活の中、時間的、精神的なゆとりが無いのが現状である。

親子クッキングに参加した保護者から、「意外と簡単だったので、家でも挑戦してみようと思う」とコメントが寄せられた。今回のクッキング教室は、「何かしたいのだけれど、何を、どのようにしたらよいかわからない」、そのように思っている保護者への手助け、子どもたちに「作って食べる楽しさ」の体験、そして、小学生とともにクッキングをすることを通じて、短大生に「自らの食をふりかえる機会」になったと思われる。

今後は、さらに栄養的な知識、食材への理解、食文化の伝承などにつながるような内容を計画したい。

7 おわりに

今年度は、本研究に基づき地域の子どもたちとの食育を通じての交流事業を4回実施した。各行事の参加者は、決して多くはないが、毎回参加する子どもや保護者がいるなど地域の方々も楽しみにしているのは確かである。また、アンケートにおいても「ぜひこのようなイベントを来年もお願いします」の意見も頂いている。これからは短大と椎木町との交流・協働事業として実施を考えている。

そして、保育者養成の学校において食育を学ぶ機会を設けることは、今後さらに求められることが推察される。

保育所では、保育所保育指針に基づき「食育の計画」作成のためのガイドラインである

「保育所における食育に関する指針」が2004(平成16)年3月に作成されている。この指針は、健康で質の高い生活を送る基本としての「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うことを保育所の目標とし、子どもの発達段階に応じた食育のねらいや配慮事項等が記述されている。

また、全国保育士養成協議会の児童福祉施設福祉サービス第三者評価(保育所)の調査項目でも、「食事の献立については、旬の物や季節感のある食材を活かし、行事食なども随時取り入れている」や「子どもが育てた野菜などを料理して食べることがある」など食事に関する調査項目が複数設けている。質の高い保育をおこなうためには食育を実践することは必須となっている。

地域の交流も少なくなってきた昨今、本事業を通して、学生と地域の子どもたちがイモ掘り会、焼きイモ会やお菓子作り教室を実施する中で、日常ではあまり体験できない自然や料理に触れ合ふことで、地域のつながりを示すことができた。「食」の大切さを子どもたちと一緒に学ぶことに本研究の意義を感ずるのである。

また、各種のアンケートを実施した結果から、保護者が食事のマナーや栄養面、食事中の子どもとのコミュニケーションを大切にしていることが分かった。そして、食事の最低限度のマナーを家庭でしつけることの重要性を再認識したのである。

このような意見を参考にしながら今後さらに保育の現場や製菓の現場で「食」に関する意識を高められたらと思うのである。

謝辞

本研究に協力してくれた佐竹ゼミの学生や製菓コースの学生、そして椎木町の方々に心からお礼を申し上げたい。

参考文献

- ・相浦郷土史編纂委員会(1993)
「相浦郷土史」
- ・文部科学省 食育推進基本計画
- ・日本子ども家庭総合研究所編(2006)
「日本子ども資料年鑑2006」KTC中央出版
- ・足立己幸「知っていますか子どもたちの食卓」
NHK出版
- ・食料・農業政策研究センター編
「食料白書 食生活の現状と食育の推進」
農山漁村文化協会